
つくば国際大学生の英語聴解力調査

——JACET基礎聴解標準テストを使ったデータ分析——

佐 藤 敏 子
中 村 典 生

1. はじめに

中学校の学習指導要領が平成元年3月15日に告示になり、平成5年4月から全面实施され、3年が経過した。外国語科の目標は、日本社会の国際化の流れの中で次の3つが設けられた。

- (1) 外国語を理解し、外国語で表現する能力の育成
- (2) 外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成
- (3) 言語や文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を培う

この目標を達成するための必要な基礎的能力は、特に(1)(2)に関してはリスニング能力であるといえる。

新里(1992:275)によると、H.E.Palmerは言語を‘language’と‘speech’に分け、前者は社会的・習慣的に確立した「体系」としての言語を表し、語彙や文型・文法など、言語を組織している要素を支配する法則性をさし、それに対して後者は、‘language’の知識をもとにして、自分の考えや感情を伝えるために、与えられた状況で実際に行う「聞き、話し、読み、書く」という活動を示すとしている。Palmerは、外国教育の中心的目標は‘speech’であると主張し、その‘speech’を2つのレベル‘primary speech’（「聞くこと」「話すこと」）と‘secondary speech’（「読むこと」「書くこと」）に分け、まず‘primary speech’を身につけるべきであるとしている。彼は、母語の習得過程と外国語の習得過程とをほぼ同一視している。

以上のPalmerの理論では、英語学習はリスニングより始めることが望ましいと言える。

近年「脳と言語機能」の研究が進み、医学的アプローチの言語習得に関する研究が外国語指導法の研究をサポートしている。植村(1996)は「右利きのほとんどと左利きの大部分で言語活動は左大脳半球の機能によるので、左半球を優位半球、右半球を劣位半球と言う。言語活動には、『聴いた言葉の意味を理解する』能力が最も基本で、これは優位半球のWernicke感覚言語野の機能による。十分な会話能力を有する多国語使用者では、各言語を司る部位はそれぞれに独立・分離している。日本語に翻訳しないと理解できない人では日本語の言語野しか存在しない。外国語学習で最も重要なことはその言語のためのWernicke感覚言語野を先ず独立させることであり、そのためにはヒアリング(listening)の特訓しかない。」と外国語学習に言及している。

ここでも外国語学習の第一歩はリスニングであると言う主張である。

以上の理論的背景より、本学の入学者の多くがsuccessful learnerとは必ずしもいえない状況を考慮すると、本学の外国語教育はリスニングから開始するのが効果的である、と言える。また、指導法の研究及び将来的にカリキュラムの見直しの必要性を視野にいと、早急に入学者のリスニング能力の調査を始めなくてはならない。

2. 目的

現在各大学では機構改革が進行中で、その中で外国語教育に関するカリキュラム再編成も進められている。本学でも、「効果的な英語学習指導法」さらに英語教育に関する新しいカリキュラムを構築するための第一歩として、本学平成8年度入学生のリスニング能力を調査する。

3. 方法

(1) 対象者

平成8年度入学者 産業情報学科学生 115名
社会福祉学科学生 125名
(両学科とも留学生は除く)

(2) 調査に使用する教材

大学英語教育学会 (JACET) の開発した「英語基礎聴解力標準テスト」Form Aをプレ・テストとして使用し、Form Bをポスト・テストとして使用する。本稿はForm Aの調査結果について記述する。

本テストは4つのPartに分かれていて、それぞれ10問ずつ問題があり、合計40問からなる。

- (1) Part 1 --- 4つの説明文を聞き、絵や写真と合うものを選ぶ。
- (2) Part 2 --- 問題文を聞いて、最も適切な答えを選ぶ。
- (3) Part 3 --- 対話文を聞き、質問に対して最も適切な答えを選ぶ。
- (4) Part 4 --- 短い passage を聞き、質問に答える。

(細かい内容についてはJACETとの協定により、公開できない。)

(3) 実施時期

Basic Form Aについては、入学してすぐの現代英語 II の時間を使い、4月の中旬までにすべてのデータがそろうように計画した。

Basic Form Bについては、ポスト・テストとして本年度12月から1月にかけて実施する予定である。

4. 結果

以上の目的・方法に基づき、行った調査の結果は以下の通りである。

表 1 両学科Part別平均値

a. 産業情報学科

Part 1		Part 2		Part 3		Part 4	
平均	6.617	平均	4.104	平均	4.061	平均	3.948
標準偏差	1.647	標準偏差	2.058	標準偏差	2.249	標準偏差	1.982
標準誤差	.154	標準誤差	.192	標準誤差	.210	標準誤差	.185
例数	115	例数	115	例数	115	例数	115
最小値	1.000	最小値	0.000	最小値	0.000	最小値	0.000
最大値	10.000	最大値	10.000	最大値	10.000	最大値	10.000
欠測値の数	0	欠測値の数	0	欠測値の数	0	欠測値の数	0

b. 社会福祉学科

Part 1		Part 2		Part 3		Part 4	
平均	7.144	平均	4.968	平均	4.696	平均	4.168
標準偏差	1.490	標準偏差	2.040	標準偏差	2.329	標準偏差	2.147
標準誤差	.133	標準誤差	.182	標準誤差	.208	標準誤差	.192
例数	125	例数	125	例数	125	例数	125
最小値	3.000	最小値	0.000	最小値	0.000	最小値	0.000
最大値	10.000	最大値	10.000	最大値	10.000	最大値	9.000
欠測値の数	0	欠測値の数	0	欠測値の数	0	欠測値の数	0

表 1 は両学科のパート別の素点平均値を示した記述統計である。

また、表 2 は両学科の素点合計と偏差値の平均値を示した記述統計である。

次に、各Partごとの両学科の平均値と全国平均（1995年）を比べてみる。図 1 はそのグラフである。

Part 1 と Part 2 では社会福祉学科の平均は全国平均を上回っているが、産業情報学科では全国平均を下回っている。Part 3 と Part 4 では、いずれも全国、社会福祉学科、産業情報学科という順序で平均値が高い。

表2 両学科の素点・偏差値平均

a. 産業情報学科

	素点	偏差値
平均	18.730	43.226
標準偏差	5.866	7.854
標準誤差	.547	.732
例数	115	115
最小値	6.000	26.000
最大値	38.000	69.000
欠測値の数	0	0

b. 社会福祉学科

	素点	偏差値
平均	20.976	46.128
標準偏差	5.902	7.948
標準誤差	.528	.711
例数	125	125
最小値	9.000	30.000
最大値	34.000	64.000
欠測値の数	0	0

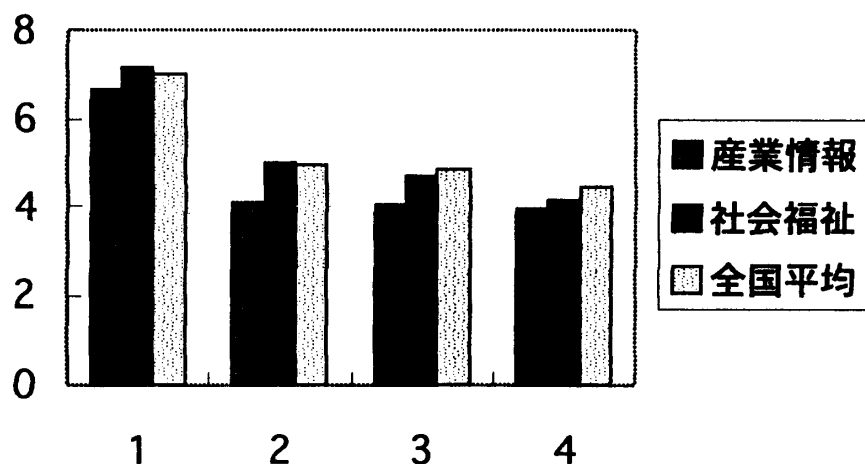


図1 Part別 全国平均との比較

全国のデータと本学2学科との有意差の検定はデータ数の差が大きいため、今回は有効ではないと判断し、両学科間の検定のみとした。表3は両学科のPartごとの平均値、素点合計と偏差値の平均値をt検定したものである。

この結果、Part1では両学科間の平均の差は有意であった(両側検定: $t(238)=2.596$, $p=0.01$)。したがって社会福祉学科の方が優れた成績をあげたと言える。Part2でも両学科間の平均の差は有意であり(両側検定: $t(238)=3.331$, $p<0.01$)、社会福祉学科の方が優れた成績をあげたと言え

る。Part 3 でも両学科間の平均の差は有意であった（両側検定： $t(238)=2.144$, $0.05 > p > 0.01$ ）。Part 4 に関しては両学科間の平均の差は有意ではない（両側検定： $t(238)=0.823$, $p > 0.1$ ）。したがって、両学科間でどちらかが優れた成績をあげたとは言えない。Part 1 から 4 までの素点合計では、両学科間の平均差の差は有意であった（両側検定： $t(238)=2.998$, $p < 0.01$ ）。したがって、社会福祉学科の方が優れた成績をあげたと言え、当然のことながら、偏差値の平均に関しても有意

表 3 両学科の t 検定

	平均差	自由度	t 値	p 値
Part 1	0.527	238	2.596	0.01
	平均差	自由度	t 値	p 値
Part 2	0.864	238	3.331	0.001
	平均差	自由度	t 値	p 値
Part 3	0.635	238	2.144	0.033
	平均差	自由度	t 値	p 値
Part 4	0.22	238	0.823	0.411
	平均差	自由度	t 値	p 値
素点合計	2.246	238	2.998	0.003
	平均差	自由度	t 値	p 値
偏差値	2.902	238	2.833	0.005

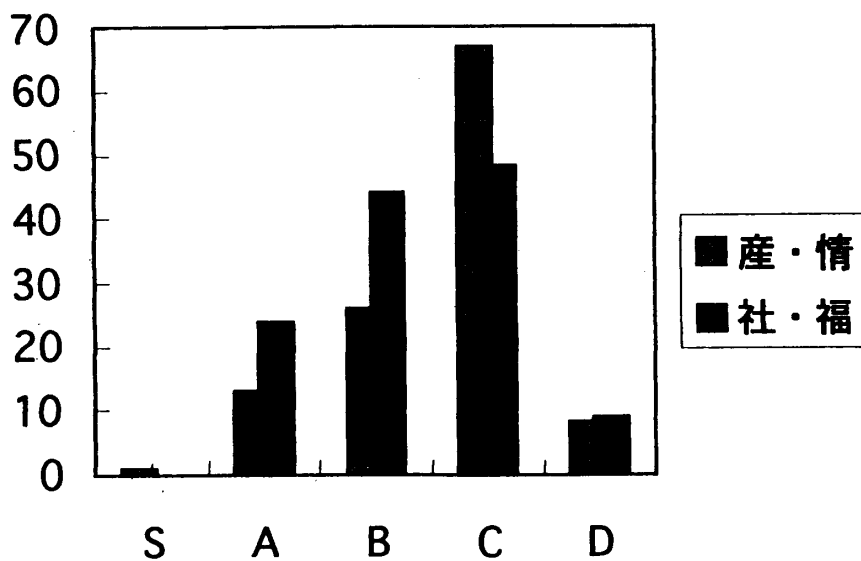


図 2 評定のヒストグラム

であり、社会福祉学科の方が優れた成績をあげたと言える。

次に、JACETが設定した標準得点（偏差値）の5段階評定（S：上位7%，A：24%，B：38%，C：24%，D：下位7%）に関して、本学学生の手istogramを学科別に比較すると図2のようになる。

更に、図2で示した成績評定を、上位グループであるSとAグループ、中間のグループであるBグループ、下位グループであるCとDグループの3つに分け、それぞれの平均値をPartごとに算出する。そして学科ごとに各グループの平均値の差をグラフにしたものが図3・4である。

平均値の差が大きいほど、◆（S・A群）、■（B群）、▲（C・D群）間の距離が大きくなっている。

図5はPart 1からPart 4まで、全40問の問題に対する両学科の正答率を、項目別にグラフにした

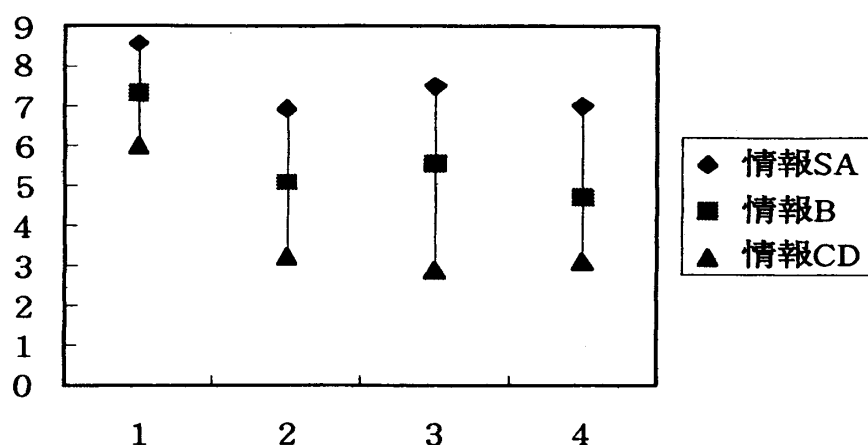


図3 産業情報学科グループ別平均値

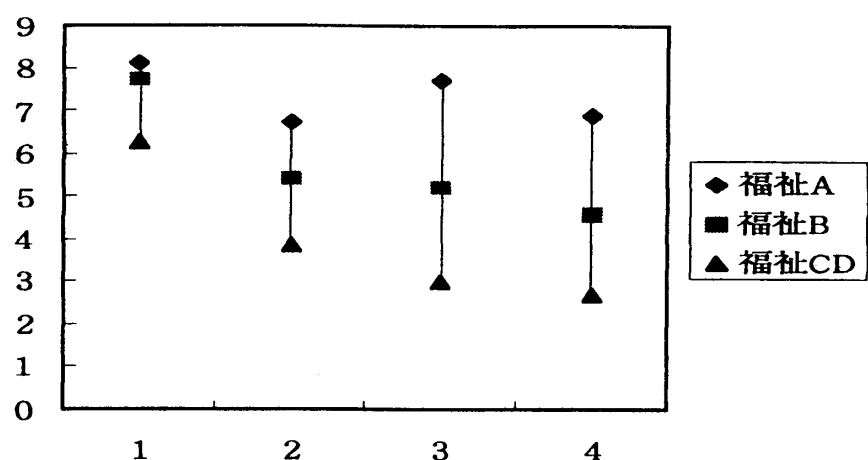


図4 社会福祉学科グループ別平均値

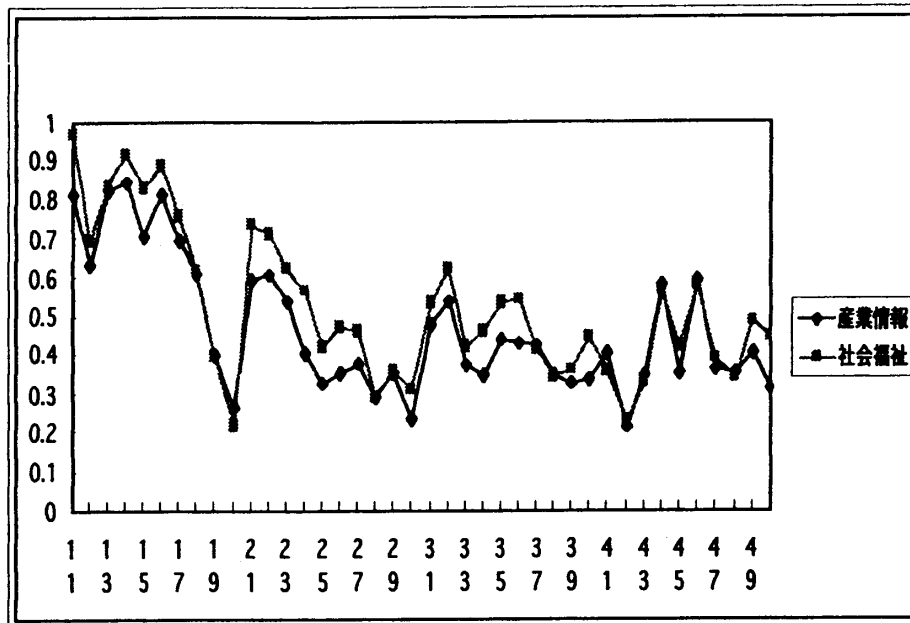


図5 項目別難易度

ものである。縦軸が正答率であり、横軸が項目番号である。（例えば、23はPart 2の第3問という意味である）

また、この図は項目ごとの難易度も表している。数値が低いほど難易度は高いと言える。

5. 考察

まず、本学の全体的な傾向について考える。図1の全国平均と両学科の平均値のヒストグラムから、Part 1、Part 2の本学の平均値は、全国平均と比べて大差がないが、Part 3と4に関しては全国平均より低い。これは、選択肢である英文の平均語数がPart 1で7.2語、Part 2では問題文・選択肢の合計平均が17.5語なのに対し、Part 3では問題文・質問・選択肢の合計平均が43.4語、Part 4では問題文・質問・選択肢の合計平均が71.3語と断然多い。これより、Part 3・4の平均点の低さは英文の量的な長さに関係しているのではないかと仮定できる。本学の傾向として、長い英文に対する聴解力に問題があることがわかる。

次に、図3・4から、成績上位群と下位群の平均差がもっとも大きいのはPart 3であることがわかる。このことから、Part 3ができたかどうかによって素点の合計が左右されている可能性が考えられる。両者の相関を調べるために、横軸にPartごとの得点、縦軸に素点の合計をとって散布図を描いてみると図6～13のようになる。

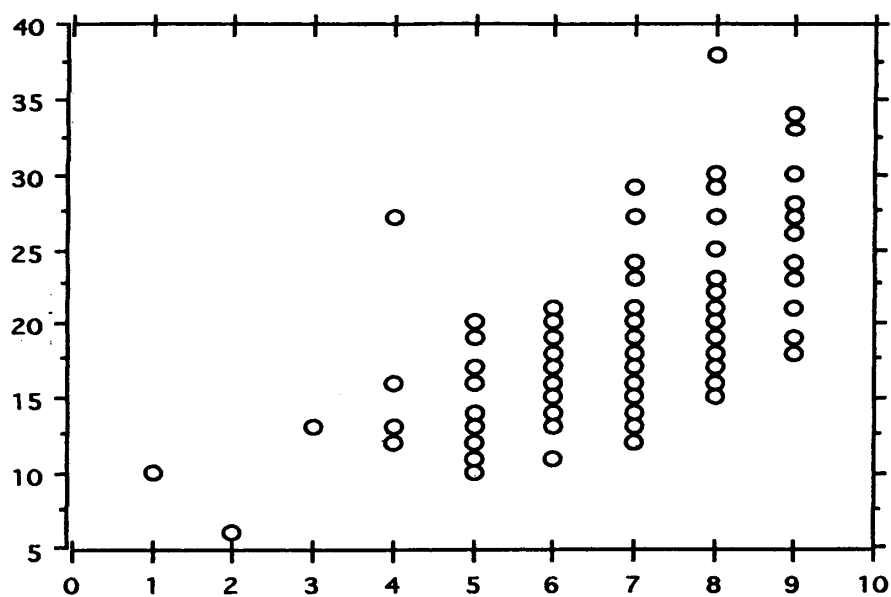


図6 産業情報学科散布図 (Part 1)

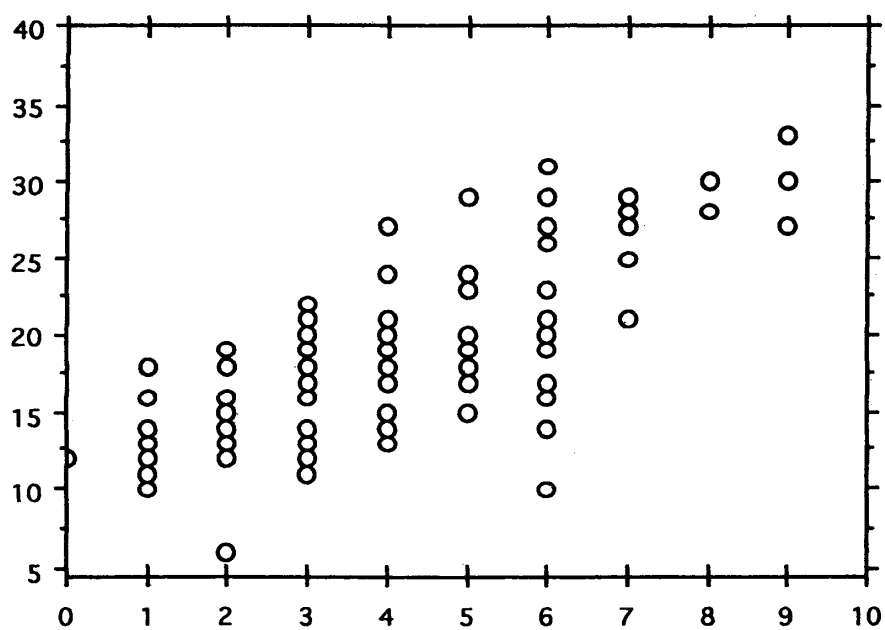


図7 産業情報学科散布図 (Part 2)

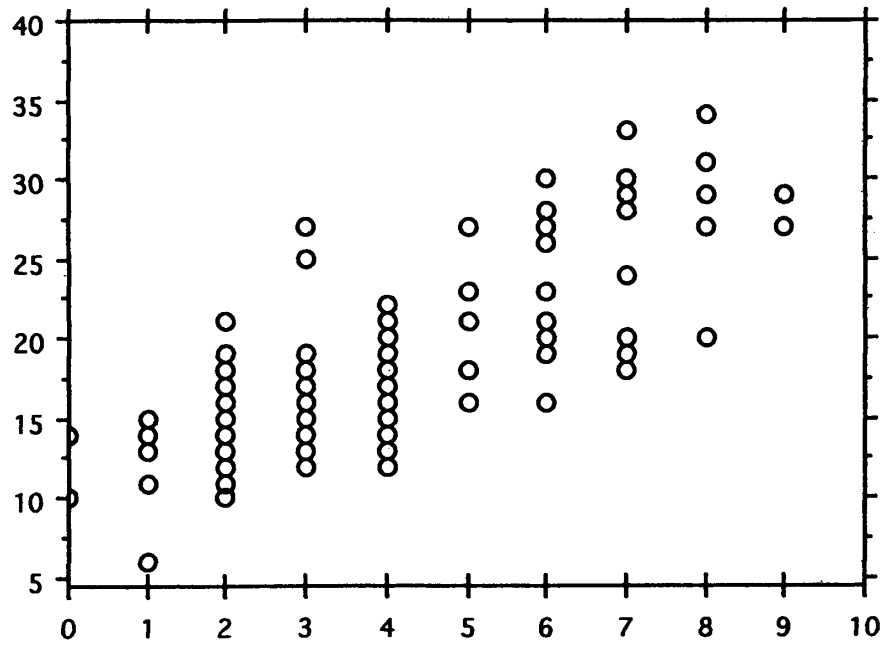


図8 産業情報学科散布図（Part 3）

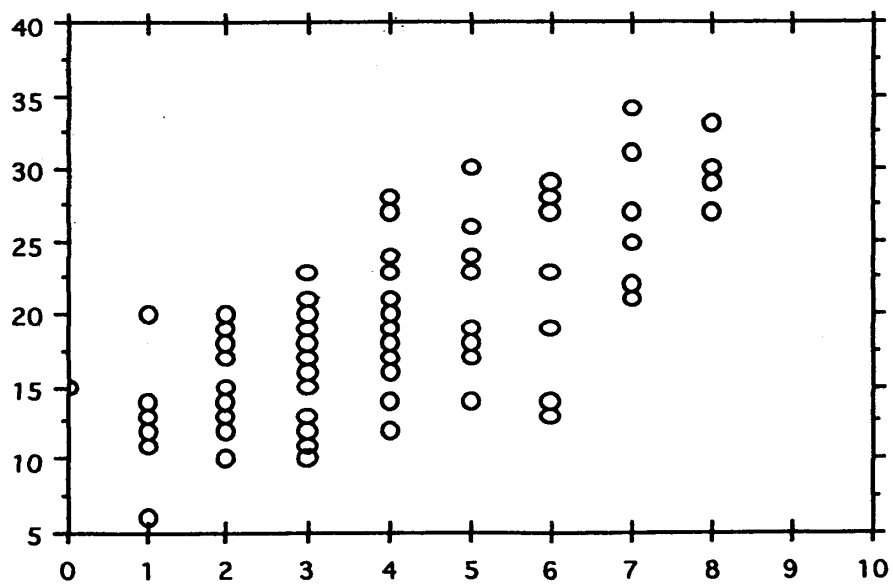


図9 産業情報学科散布図（Part 4）

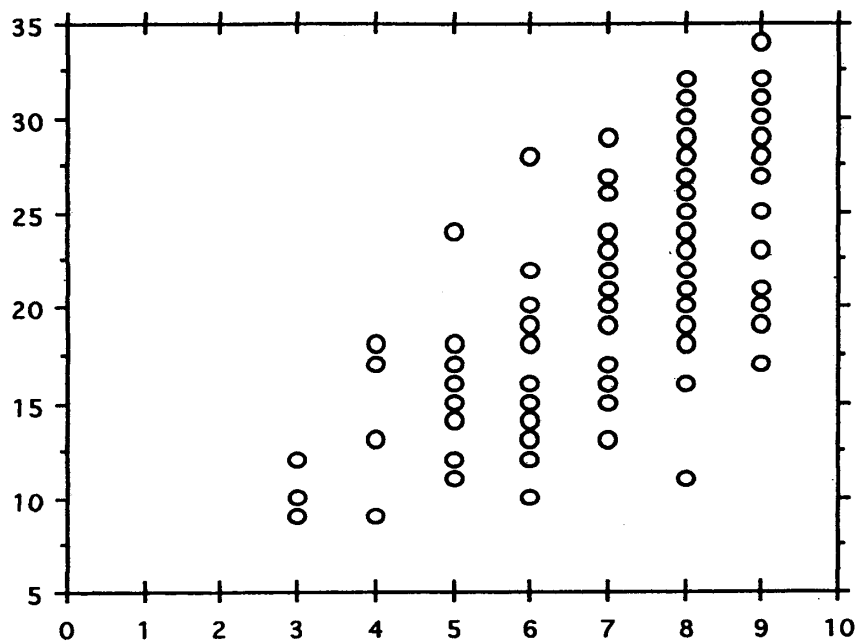


図10 社会福祉学科散布図 (Part 1)

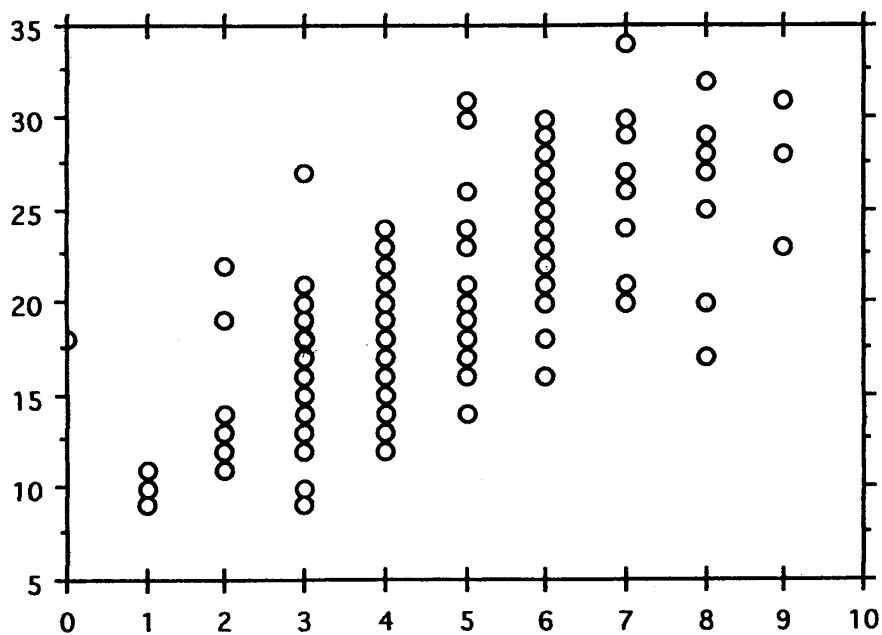


図11 社会福祉学科散布図 (Part 2)

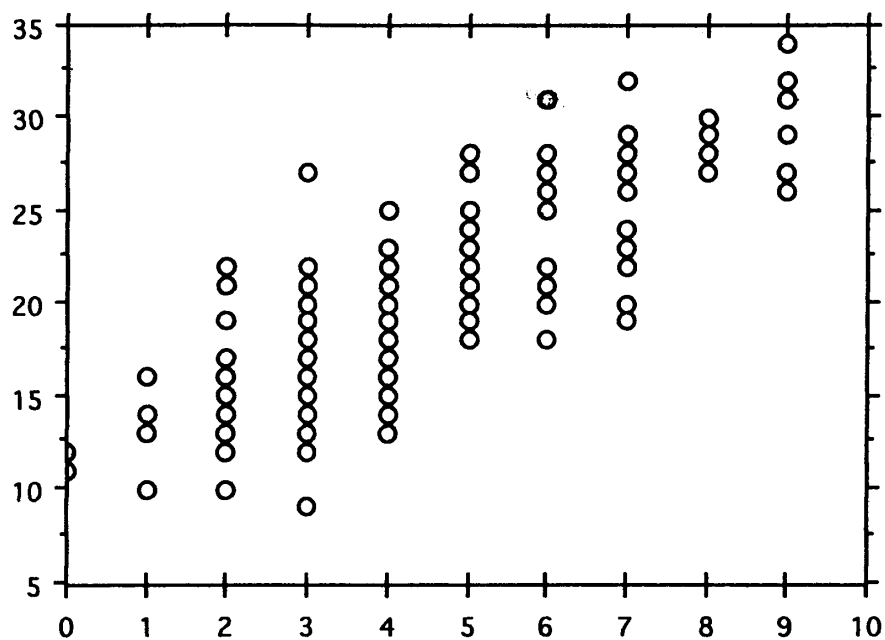


図12 社会福祉学科散布図（Part 3）

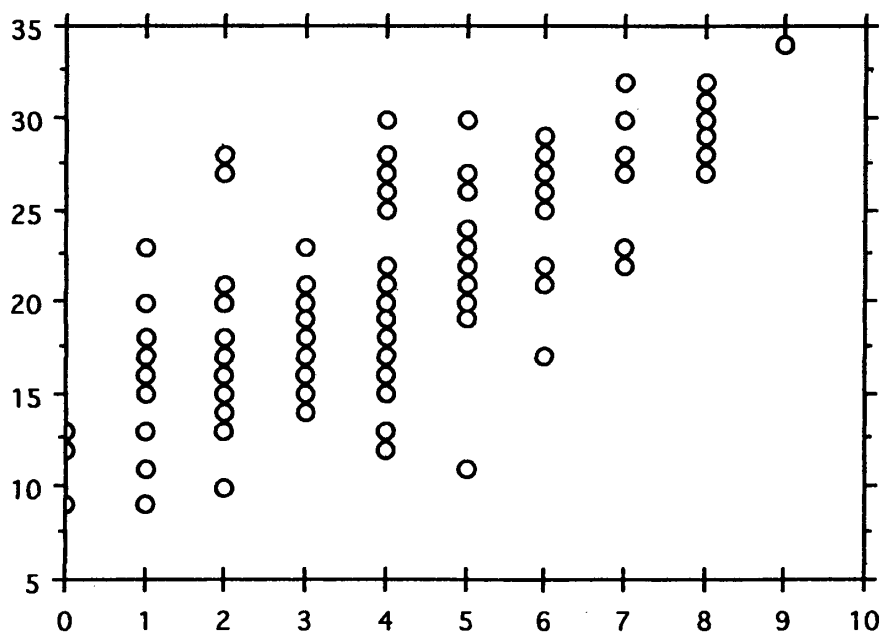


図13 社会福祉学科散布図（Part 4）

表4 各Partと素点合計の相関係数

社会福祉 Part 3	$r = 0.829$
産業情報 Part 3	$r = 0.787$
産業情報 Part 2	$r = 0.749$
社会福祉 Part 4	$r = 0.731$
産業情報 Part 4	$r = 0.728$
社会福祉 Part 2	$r = 0.697$
産業情報 Part 1	$r = 0.676$
社会福祉 Part 1	$r = 0.658$

さらに、Part 1 からPart 4 と素点合計との相関係数を調べ、相関係数が高いものから順に並べたものが表4である。

以上より、両学科で相関係数が高い、Part 3 の問題傾向を分析することで、本学学生の聴解力に関する重要な知見が得られると考えられ、以下にPart 3 について考察する。

Part 3 は、既述のようにPart 1・2 に比べると問題文の英文が長い。注目すべき点はPart 3 が会話文の問題であることである。会話文中には読み・書き言葉には馴染みの少ない決まり文句、言い回しが使われることがあり、また reduced form が多用される。よって、このような形に慣れていない学生にとっては、Part 3 の正答は非常に困難になることがうかがわれる。

次にPart 1 の問題の正答率が他のPart に比べて非常に高いことについて考える。これに関しては、Part 1 の問題文が短いことがひとつの大きな理由であると考えられるが、さらにこのPart にのみ、視覚に頼ることのできる絵が提示されていることに起因していると考えられる。竹蓋(1984)が言うように、我々が解釈を行う際には、次の会話を予測するという作業がある。絵は問題が始まる前にすでに提示されているわけで、どのような問題であるのか、大方の見当をつけることができ、聞く以前に既にスキーマがある。これを言い換えれば、絵からの情報により、解釈の際に必要な不可欠であるコンテキストを、ある程度限定する作業ができていると言える。一方、聴覚のみに頼るPart 2 から4 までの問題では、Part 1 でできたような予測ができない。この違いがPart 1 の正答率の高さにつながっていると考えられる。

正答率の高いこのPart 1 の中で、10番の問題だけがきわだって正答率が低いことが図5 よりわかる。この原因は、提示されている建物の絵が、日本の文化的にみて2階建てにも3階建てにもみえるものであり、何階建てかという判断が必要なこの問題は、リスニングの範疇ではなく、文化的背景の知識が関係してくる。適切な絵の提示が必要であると思われる。

6. 結論

以上の考察より、今回の調査から得られる仮説は以下の通りである。

- (1) 本学学生は長い英文のリスニングに困難を感じる
- (2) 本学学生にとって、Part 3 にみられるような、会話文の聴解力伸長が重要課題である
- (3) 会話文の聴解が苦手な学生は、会話文の特性に慣れていない学生である
- (4) Part 1 の正答率が高いのは、最初に絵が提示されているからである
- (5) Part 1 の10番の問題の正答率の低さは、提示されている絵の不適當さによるものである

これより、今後検証する必要があることは、(2)(3)で問題であるとした会話文聴解力の伸長は、どのような指導によって達成できるのかということと、その会話文聴解力の伸長が、本当に本学学生の総合成績伸長に寄与することができるかどうかということであるように思われる。これを今後の研究課題としたい。

一つの方法として考えられることは、会話文中に頻繁に登場する、Reduced Form の聞き取りの練習が、会話文聴解力に伸長につながるかどうかを調べることである。これについては、現在、本学の現代英語Ⅱで、*Practice in English Reduced Forms*（小林栄智・Richard Linde（監修）1995 三修社）を教材に用いて実験中である。その学生たちのJACETポスト・テストの結果を調べることによって、何らかの結論が得られる可能性があると思われる。

（さとう・としこ 産業情報学科）

（なかむら・のりお 産業情報学科）

参考文献

1. 千葉修司・ケビン・グレッツ・平川真木子（訳） 1992 『普遍文法と第二言語獲得』 リーベル出版
2. 清川英男 1990 『英語教育研究入門』 大修館書店
3. 小林栄智・Richard Linde（監修）1995 *Practice in English Reduced Forms*. 三修社
4. 小池生夫監修 1994 『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』 大修館書店
5. Larsen-Freeman, Diane and Long, M.H. 1991 *An Introduction to Second Language Acquisition Research*. Longman
6. Lydia White 1989 *Universal Grammar and Second Language Acquisition*. John Benjamins Publishing Company
7. 文部省 1993 中学校外国語指導資料『コミュニケーションを目指した 英語の指導と評価』 開隆堂出版
8. 新里真男 1992 『H.E.Palmerの指導法とその現代性』 筑波大学学校教育部紀要第14号
9. Penny Ur 1984 *Teaching Listening Comprehension*. Cambridge University Press
10. 竹蓋幸夫 1984 『ヒアリングの行動科学』 研究社
11. 田中敏・山際勇一郎 1994 『ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』 教育出版
12. 田崎清忠 1995 『現代英語教育法総覧』 大修館書店
13. 植村研一 1996 「脳から見た外国語教育」 語学ラボラトリー学会 第36回全国研究大会講演資料

Data Analysis of JACET Listening Comprehension Test Basic Form A: A Case of the Students at Tsukuba International University

Toshiko Sato

Norio Nakamura

Our concern is to examine strategies for successful acquisition of listening comprehension skills. We begin by showing how our students' listening comprehension skills are.

The procedure for this paper is as follows:

- (1) JACET Listening Comprehension Test Basic Form A was given to the students at Tsukuba International University in April.
- (2) The results of the test were analyzed.

The following results were obtained:

- (1) It seems that our students find it difficult to listen to a long passage.
- (2) They seem to be unfamiliar with colloquial style.
- (3) We can safely state that it is the most difficult for them to listen to reduced forms of words.
- (4) Pictures help them understand what they listen to.
- (5) Pictures should be adequate ones for listening comprehension tests.

Key words: Listening Comprehension, Reduced Form, Listening Strategy, JACET Listening Comprehension Test